

チェルノブイリの子どもたち

チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 111 2018年10月20日発行



2018年夏 子どもたちの保養 ウクライナ・ベラルーシ



★2019年チェルノブイリ救援カレンダー完成しました
お申込受付中

詳細は同封のチラシ、本号13頁をご覧ください



報 告 会

「2018年夏 子どもたちの保養・チェルノブイリと福島」

12/1 (土) 14:00~16:00

会場: パルシステム東京 新宿本部 7F 会議室

~~~詳細は13頁をご覧ください~~~

~~ 本号の目次 ~~

p.2~5 子どもたちの夏の保養

p.6~9 ベラルーシの家族訪問

p.10 里親のページ

p.11 宮西いづみさんを偲んで

p.12 黒部ドクターのお話し

p.13 報告会/2019年カレンダー

p.14 民芸品と書籍のご案内

p.15 募金・救援状況

p.16 事務局から

## 放射線汚染地域に住む病気の子どもたちのための特別保養

2018年夏 ウクライナ・ベラルーシ

今年もみなさまからのご寄付のおかげでウクライナとベラルーシの子どもたちを保養に招待することができました。保養の引率で参加したウクライナの教師は、「悪影響を通じて事故が過去のものでないことを思い知らされているが、国による保養は事実上行われていない」と言います。ベラルーシの保養に参加した病気の子どものうち、二人の子どもの母親は事故後に甲状腺の手術を受けています。健康への影響は次世代まで続いています。

### ウクライナの子どもの保養

■場所：ヘルソン州ゴーラヤ・プリスタニ地区  
子ども保養施設「ドルフィン」

■期間：2018年7月18日～7月29日（12日間）

■参加者：子ども33人（8歳～16歳／ジトーミル州ナロジチ地区及びオヴルチ地区、ロヴェンスク地区）、引率者3人（教師2人、医師1人）

■参加者の病名：腎盂腎炎、気管支炎、気管支喘息、心筋症、甲状腺腫、胆道運動異常症、背骨の奇形、膝炎。

#### <引率者からの手紙>

「チェルノブイリ原発事故から32年が経ちました。しかし、その被害がすぐになくなることはありません。今も様々な病気や予測、その他の悪影響を通じて、事故がまだ過去のものではないことを私たちは思い知らされています。

事故後何年かの間、この事故がウクライナの国民全体の関心事であった当時、国は子どもや大人の被災者の保養・健康回復のための様々なプロジェクトを導入しました。しかし時と共に、状況は根本的に変化してしまいました。現在では、（国による）保養は事実上行われておらず、そのこと自体、人々からは忘れ去られ、顧みられもしなくなりました。

教育者として今回の保養グループの参加者33名を選ばなくてはならなくなり、私は途方に暮れ、どうしたらよいか分からなくなりました。といいますのも、その子どもたちをほぼ1万3千人の対象者の中から選ばなくてはならなかったからです。つまり、今回の海辺での保養

に参加できるチャンスを得られるのは1000人に1人でした。100人の子どもたちが学ぶ、それほど大きくない学校でさえ、その半分の子の親が、我が子にとっても深刻な病気があることを証明する書類を私のもとに持ってきました。

そのため、何とか参加者のリストをまとめるために、選考基準がますます厳しくなりました。まず、今まで一度もサナトリウムでの保養に選ばれたことがなく、海を見たことがない子どもたちに絞りこみました。そしてその中でさらなる基準を設け、家族構成や家計状況、海水温水浴療法を受ける必要性、その他の基準をもとに選ぶことにしました。

こうしてすべての基準を満たして非常に限られた幸運を手に出来た子どもたちは、実際に海へ行くずっと前から、その日を指折り数えて待つことになったのです。かくして、待ちに待った出発の日がやって来ました。子どもたちは喜びの表情、親たちは心配顔です。実際、海までの道りは平坦ではありませんでした。子どもたちは出発までに備えてはいましたが、その道



中、乗り物酔いに見舞われ、そのために意気消沈してしまいました。とはいえ目的地のジェレズヌィ・ポルトに到着すると、子どもたちは真っ先に海を見に駆けて行きました。このため、保養期間中、最大限時間の許す限り、私たちは浜辺で時を過ごすようにしました。もっともそれだけでなく、子どもたちが互いに知り合うための催し、歌の催し、ダンスの催し、絵を描く時間、ゲームの時間、各種大会、貝殻集めの遊びなど、数多くのプログラムが行われました。さらにとっても思い出深いものとなったのが、「タヴリヤ緑の村」（\*アスレチックなどを備えた公園施設）への遠足です。子どもサナトリウム「ドルフィン」で、子どもたちは数多くの面白いものを目にし、そして学ぶことが出来ました。

参加した子どもたちは、今回の保養で経験した数多くの場面を今も思い出と共に振り返っています。そしてこの保養の旅を企画してくれた国際慈善基金「チェルノブイリの子どもたちの生存」、この素晴らしい思い出のために援助して下さいた日本の「チェルノブイリ子ども基金」とその支援者の皆さまに対して感謝しています。今も参加した子どもたちは今回の保養の写真やビデオを見て懐かしんでいます。

かくしてこの夏は過ぎ去り、新しい学年がスタートしました（\*旧ソ連では新学年が9月開始）。子どもたちには一層勉強に励む意欲が生

まれました。勉強をもっと頑張り、日々の生活態度を良くすることで、来年も保養の旅に参加できるチャンスが増えることを願っているからです

（ウクライナ・ロヴノ州ロクチノエ地区オスニツク普通教育学校情報・物理・数学担当教師  
ミハイル・マリニッチ）

### <子どもたちの感想>

★この保養のおかげでたくさんの新しい友だちができました。私たちが過ごした保養施設「ドルフィン」はとても楽しいところでした。コンクール、ディスコなどよい思い出ばかりです。もう一度ここへ来たいです。保養に招待してくれてありがとうございます。（ダリーナ・女・13歳・ナロジチ市）

★みんな楽しかったけれど、特に思い出に残っているのは「タヴリヤ緑の村」への遠足です。海で泳いで、浜辺で遊びました。とても幸せな気分で家に戻りました。日本のみなさんありがとうございます。（ヤロスラフ・男・11歳・ナロジチ市）

★今年、海へ行けたのはとても幸運だった。海で泳ぐ、海辺で過ごす、それだけで素晴らしかった。家族もとても感謝しています。（ヴィタリー・男・13歳・トマシゴロド村）

★素晴らしい保養をありがとうございます！私は生まれて初めて海を見ました。海の空気を思いっきり吸い込みました。（アンナ・女・11歳・トマシゴロド村）



## ベラルーシの子どもの保養

- 場所：子どもリハビリ・健康回復センター  
「ナデジダ（希望）」 ミンスク州ビレイカ地区
- 期間：2018年8月2日～8月25日（24日間）
- 参加者：子ども28人（8～17歳／ゴメリ市、レチツァ市、モーズィリ市、ブラーギン市、レリチツァ市）、引率者2人（教師1人、看護師1人）
- 参加者の病名：脳腫瘍、目の腫瘍、悪性リンパ腫、精巣腫瘍、腎臓がん、肝臓がん、神経芽細胞腫、筋線維芽肉腫、白血病、血小板減少性紫斑症、染色体疾患。

1日のスケジュールは、午前中は治療に充てられ、午後はクラブ活動（木工細工、手芸、陶芸、絵画、シンセサイザー）の他、スポーツ大会、コンクール、コンサートなどがあります。夜ディスコや映画上映があります。資料室にある“チェルノブイリ原発30キロ圏内立体地図”を見ながら放射能の説明を受けたり、施設から数キロ離れたところにあるナデジダの太陽光発電を見学したりしました。近くにある湖での水浴や、キャンプファイヤーもありました。敷地内にはブランコやジャングルジムなどいろいろな遊具があり、遊び場所には困りません。庭園内にある「足裏マッサージ」コーナーも人気があります。木片、木の実、石、苔など自然の素材が敷き詰められたところを、子どもたちは「気持ちがいい」「ちょっと痛い」とキャーキャー言いながら裸足で踏みしめていました。食事は三食の他に、軽食（果物、ヨーグル

ト、パンなど）が3回あります。保養終了後のアンケートでは、多くの子どもたちが「食堂の食事は美味しかった」「食事の量は十分だった」と書いていました。子どもたちの引率者2名の他、「ナデジダ」の教育担当者、心理カウンセラー、医師たちは、滞在中の子どもたちの生活全般に気を配ります。参加者28人のうち、初めて参加した子どもは7人。最初の1～2日は家を恋しがって泣いていた小さい子ども、すぐに環境に慣れ友だちと仲良くなり、最後は、帰りたくない、もっとここにいたい、というほどでした。

### <小児科医の感想>

9歳の女の子は、到着後まもなく熱を出し、数日間施設内の病室で過ごしました。この子は最後まで咳が続きました。後半も2人の子どもが数日間病室で過ごしました。免疫力が低い子どもが多いです。皆いくつもの病気を抱えています。たとえば11歳の男の子は腎臓がんで片方の腎臓を切除。残っている腎臓が慢性腎盂腎炎で、慢性扁桃炎と脊椎側弯症もあります。この子は、スペレオセラピー（天然の塩の壁で囲まれた部屋で過ごす。呼吸器官の病気に効果がある）、鼻・喉を温める治療、酸素カクテル（泡状の酸素飲料）、療養体操、吸入治療（ネブライザーによる）の5種類の治療を受けました。他の子どもは症状により、マッサージ、アロマセラピー、シャワーや浴槽での水による治療などを受けました。保養開始時と中間、最後に健康状態を確認します。治療内容と効果をカルテに書き込み、家に持ち帰り、家族とかかりつけの医師



がわかるようにしています。健康上の問題でスポーツの催しに参加できない子どももいます。腫瘍病の治療はここではできませんが、他の症状を緩和することと、免疫力を上げることができます。それを目標にしています。(ナデジダ医療センター・小児科医)

### <引率者の感想>

●年齢の違う 28 人の子どもの世話をするのは大変でしょう、と言われますが、実はそうではありません。大きい子は、小さい子の面倒をしてくれます。小さい子は大きい子を見習って、私たち大人の手伝いをしてくれたりもします。とても仲の良い、大きな家族のようでした。(スヴェトラナ・N)

●24日は長いように思えて、実はあっという間でした。毎日、朝から晩まで治療、クラブ活動、催し物といろいろなことで忙しく、暇な時間ありません。ナデジダの職員は、医師から掃除の人まで、みんな心のこもった対応をしてくれて、感謝の一言です。(アレーシャ・N)

### <子どもたちの感想>

★素晴らしい保養をありがとうございます。健康状態はよくなりました。新しい友人ができました。(アーニャ・女・16歳・レチツァ市)

★木工細工の教室が楽しかった。食事はとてもおいしかった。(アルチョム・男・13歳・ゴメリ市)

★この保養に招待してくれた日本のみなさん、

私たちの世話をしてくれた引率者とナデジダのみなさん、ありがとうございます。(リーザ・女・9歳・ゴメリ市)

★初めて保養に保養に参加しました。ダンスを練習して舞台の上で発表した。友だちがたくさんできて楽しかった。(クシューシャ・女・9歳・ゴメリ州ラパチノ村)

★ここは保養のための素晴らしい施設です。健康によいというだけでなく、友だちとの交流や、新しい知識や経験を得ることもできました。保養に招待してくれたみなさんに心から感謝します。

(ナースチャ・17歳・女・レチツァ市)

★保養を通していろいろな人と交流できたのがよかった。今年で最後なのがとても残念。自分は子どもの時に大変な病気をしたけれど生きてこられた。だからこれからも大丈夫だと思っている。何があろうと心の準備はできている。自分を信じている。(リョーニャ・男・17歳・ゴメリ市)

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

アンケートの「来年もまたこの保養に参加したいですか？」の質問には全員が「はい」と答えていました。今回の参加者の中に17歳の子が3人いました。18歳が成人とされているこの国では、子ども専用施設で保養ができるのは17歳までです。今年が最後となる本人も、またこの保養で親しくなった友人たちも、別れを惜しんでいました。一人の女の子は9月から教育大学の1年生です。「将来教師になったら、引率者としてまたここに来るかも!」と言いました。

(報告 佐々木真理)



子ども基金は、ベラルーシの慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」(以下、「困難」)を通して里子支援を行っています。甲状腺がんの子どもをもつ母親たちによって設立された団体ですが、今も次世代の子どもたちの支援を続けています。設立当初、「困難」の会員には、ゴメリ州レチツァ市とその周辺の村に住んでいる甲状腺がんと白血病の子どもが多かったそうです。「困難」では、ベラルーシの小児がんセンターで手術・治療を受けた子どものリストから、支援の必要な子どもを探します。「私たちの団体の会員になるといろいろな支援が受けられます」と連絡すると、「一体どこで私たちのことを知ったのか」「自分たちの問題だから放っておいて」と断る、病気の子どものいることを周りに知られたくない家族もいるといいます。「困難」代表のワレンチーナさんと一緒に、新たに日本の里親から支援を受ける子どもを訪問しました。

### N・キーラ (2009年生まれ)

#### レチツァ市

神経芽細胞腫。5歳の時に病気がみつかった。腹腔内の腫瘍を切除した。母親、祖母と3人暮らし。父親は2012年肺炎により死亡。キーラの姉は2016年、22歳で子宮頸がんのため死亡。2015年に病気が見つかったときにはステージ3で手遅れだった。教師の仕事をしてきたため毎年健康診断を受けていた。医師が診てくれたのだと思う、と母と祖母は言う。

母親オクサーナ(1974年生まれ)の話。「キーラは元々体が弱かったのですが、あるとき腹痛を訴え、高熱を出しました。最初、地元の病院では腎臓の病気を疑われ、その後ゴメリの小児外科へ。そこではどの医師も「こんな病気は診たことがない、別の所へ行って」と言い、たらい回しにされました。「娘は少し食べるとすぐに吐いてしまう。腎臓ではなく、お腹を見てください、お金を出しますから!」と訴えました。その後ミンスクの小児がんセンターへ送られ、左の下腹に拳大の腫瘍があることがわかりました。そこで医師に「一体こんなに大きくなるまでどうして放っておいたのか」と言われ、茫然としました。手術で腫瘍をすべて

摘出しました。今もよく鼻血を出します。半年に一度、外科・腫瘍科の定期健診を受けています。

キーラは病気で怖い思いをして、さらに目の前で姉が亡くなったことに大変ショックを受けていると思います。そのことはあまり話さないし、忘れようとしているように見えます。私自身もそうしています。夫が亡くなり、次女キーラが病気になり、長女が亡くなりました。私はショックでどうしてよいかわからない状態でした。ワレンチーナの団体のおかげで、どんなに心強かったかわかりません。親身になって助けてくれています」



祖母は年金生活者。チェルノブイリ事故当時のことをよく覚えているという。「とても暑い日でした。私は下の娘を妊娠中でした。初め、事故のことは何も知らされませんでした。5月1日、メーデーのパレードに家族で参加しました。知っている人は早く避難していたようです。私たちはメーデーの後で「危険だから窓を閉めてください」と言われましたが、何のことなのかよくわかりませんでした。長女は当時12歳。事故後、5月中旬から約3か月間、学校単位で町から避難しました。9月の始業式には戻ってきました。その後よく頭痛を訴えていました。86年生まれの次女は鼻血をよく出していました。背骨にも問題があります。

この間の辛かったことを話していると今でもこうして泣いてしまいます。でも今日あなた方と会い、話を聞いてくれたことで少し心が楽になりました。孫のキーラは、悲しんでいる私を励ましてくれます。おばあちゃん、外に散歩へ行こうよ、とか、きれいにしてあげるね、と髪の毛をとかしてくれたりします。まだこんなに小さな孫娘がこんな恐ろしい病気になるのは、絶対にチェルノブイリ事故のせいだと思います。それしか考えられません」



(亡くなった姉に一番なついていたというネコと)

## コヴァリョワ・リーザ (2013年生まれ) レチツァ市



脳腫瘍 (小脳半球の星細胞腫)。水頭症。両眼の斜視。言語発達の遅滞。1年に2度、ミンスク市の小児がんセンターに定期検査を受けに行く。リーザの部屋にはたくさんのぬいぐるみや人形、おもちゃがあった。多くが入院中の小児病院でもらったものだという。両親、兄(22歳)と暮らしている。私たちが訪れた日の週末は兄の結婚式だった。

母親スネジャーナ (1975年生まれ) の話。「リーザは健康に生まれました。10か月で歩き始め、少しして話し始めました。でもよく転ぶようになり、そのうち這ってしか動けなくなり、全く歩けなくなりました。地元の病院では何もわかりませんでした。自費でミンスク市の腫瘍センターへ行き、脳腫瘍と診断されました。2015年、1か月の間に5回の手術を受け、腫瘍を全て摘出、手術後1か月入院。常に体を起こしておく必要があり、横になって寝ることができませんでした。長く困難なりハビリが続きました。この間リーザは強い痛みと恐怖を感じていたようでした。手術後、斜

視が出始めました。今も時々頭がふらふらするようです。大きな腫瘍を全て取り除いたため、そこが空洞になった状態から元に戻るまで時間がかかるようです。幼稚園に通っていますが、転んだりしないようとても注意しながら暮らしています。腹痛を訴え、消化器官の問題もあります。明後日、血液検査の結果を聞きに行きます。よく風邪をひき、薬や食べ物のアレルギーもあります。長男(1996年生まれ)は、小さいとき血液の問題があり、血液病専門病院の患者として登録され、長い間治療を受けました。

娘が病気になってから、ストレスのせいで記憶がなくなっただけです。ミンスクの小児病院はものすごい患者の人数でいつも行列でした。最初の検査で腫瘍がわかったとき、「こんな小さい子どもの頭に、こんな大きな腫瘍！一体今までどこで何をしていたの？」と言われてきました。それを聞いてからはもう地元のホテルは信用できなくなりました。リーザは最近やっとブランコに乗れるようになりました。それだけでとてもうれしいのです」

### **N・マーシャ (2010年生まれ)**

#### **レチツァ市**

頬骨の筋線維芽肉腫。 母親オリガ(1989年生まれ)の話。「マーシャは生まれたときは健康で、活発な子どもでした。3歳の時、左目の下に小さい陥没があるのに気づき病院に行きました。腫瘍と診断され、ミンスクの小児がんセンターで1ブロックの化学療法を受けました。1か月後左頬骨の腫瘍を切除する手術を受け、その後1か月間入院。私はちょうどその時



下の娘を出産したばかりだったため、マーシャには夫が付添いました。治療を終え退院し、現在は小康状態を保っていますが、風邪をひきやすいです。半年に1度小児がんセンターへ定期健診に通っています。9月から3年生です。同じ学校にもう一人小児がんの子どもがいます。8月、子ども基金の保養プロジェクトに招待してもらいとても感謝しています。学校から別の保養所に行ったときは、天候もあまりよくなくて、治療もアロマセラピーだけでした。今回は天気もよく、治療もたくさん受けました。少し太り気味だったので1キロ健康的に痩せたのはよかったです。いろいろなことがありとても楽しかったようです」家の庭には、畑、リンゴの木、鶏小屋、父親手作りのブランコがある。

### **T・イリーナ (2015年生まれ)**

#### **ナロヴリャ市**

右腎の腎芽腫(腎臓に発生する悪性腫瘍)。障害児に認定されている。両親、姉(2005年生まれ)の4人暮らし。

母親スヴェータ(1986年生まれ)の話。



「2016年6月、娘のお腹が張っていることに気づき、地元の病院で検査を受けました。その後ミンスクの小児がんセンターに行き、9月に6ブロックの化学療法、その後手術を受けました。右の腎臓の一部を切除しました。2017年2月に治療が終了しましたが、4か月後の検診で転移が見つかり、化学療法、照射療法を受けました。2017年9月に右腎臓を全て摘出。7時間に及ぶ手術でした。イリーナはもう腎臓が一つしかありません。この町からミンスクの病院まで、毎週のように往復しました。病気の子どもを連れて公共交通で乗り継いでいくのはとても大変です。初めは近所の知人などに車で乗せて行ってもらいましたが、毎回都合よくいかず、子どものために必要だと思い中古車を買いました。小児がんセンターには常に多くの患者がいました。2016年9月の化学療法を受けるときにすでに、障害児に認定されました。期限は2021年9月31日までです。化学療法後、髪の毛も眉毛もまつ毛も全部抜け落ちました。3か月前から生え始めた。退院後は、免疫力が落ちているので、しばらく家で過ごすように言われました。大分回復してき

て、医師の許可が出ましたので、9月からは幼稚園に行きます。イリーナはとても楽しみにしています。

昨年12月に夫が職場を解雇された。今はロシアに出稼ぎに行っている。定収がないのでとても不安です。日本からの支援はとてもありがたいと感じています」

ここが汚染地だということについてどう思うか、との質問に対し、「今住んでいるところに対して、特に放射能に対する恐怖は感じていません。ただ、このあたりの森できのこやベリー類を採ったりはしません。きのこならマッシュルームを買っています。汚染があるとと言われても、引っ越すのは簡単ではありません。どこにも行く当てはありません。以前引っ越した人で、またここへ戻ってきている人もいと聞きます」

イリーナはおもちゃの注射器、聴診器、小瓶やスプーンなどを使い、自らがお医者さんになって、母や姉の治療をする遊びをしている。母は「この子は本当に将来お医者さんになるかもしれませんね」と笑う。10歳違いの姉は、妹の面倒をよく見ている。



(手にしているのは子ども基金が支援している子ども用ビタミン剤)





## 里親のページ

チェルノブイリ子ども基金では1998年から甲状腺手術後の子どもたちの里親支援を開始しました。日本の里親が一人の子どもに対し、月50ドルを2年間支援。2年後に再度里子の情報をお伝えし、支援の継続・終了を里親に決めていただきます。現在は、さまざまな腫瘍病、血液病など65人の子どもたちが支援を受けています。今年7月から新たな支援を受ける子どもが6人います。さらに支援の必要な子どもの情報が現地団体から届いています。ご関心のある方は事務局へご連絡ください。詳しい資料をお送りいたします。

\*\*\*\*\*

✉ あなたのご支援に深く感謝を申し上げます。私は今年ゴメリの医科大学を卒業し、小児科医として働く予定です。1年間モーズィリ市の小児病院で働き、その後、2年間エリスク市の病院で働きます。私の方は変わりありません。つい最近、ミンスクの病院での検査から戻ったところです。家族からあなたにくれぐれもよろしくとのこと。長い間ご支援いただき、本当にありがとうございました。タケシさんご家族のみなさんのご健康とご多幸をお祈りします。2018年7月24日 ナースチャより（ベラルーシ）

✉ 私たち家族に対する物質面、金銭面、精神面でのご支援にあらためて感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。障がいのある子どもは、とても弱く傷つきやすい存在であり、他の人からの助けを本当に必要としています。4月27日に息子のニキータは16歳になりましたが、心は明るく善良で、小さな男の子の時のまま変わりません。でも残念ながら息子は病気なのです。障がい児認定期間は、3年間延長されました。2016年に義務教育課程の9年生を卒業し、ナロヴリヤ高等職業専門学校の運転士養成専門課程に入学しました。一生懸命勉強し、音楽の先生は彼の音楽の才能を認めてくれ、時々音楽のコンクールにも参

加しています。彼には友達も増えましたが、残念ながら、コンプレックスに落ち込むこともとても多くなっています。というのもニキータは農業研修の作業や、体育関連の催しには行けないからです。やはりそうした場というのは、（友達が彼に言うように）「すごく良い！」ものなのです。でも、私は彼がこの「不運」をうまく乗り越えてくれると思っています。私たちの支え、学校の心理的サポートは徐々に成果をあげています。残念ながら私たちの家族は全員が病気を抱えています。私も医者にかかることが多くなり、特に婦人科や内分泌科にかかっています。夫は高血圧症です。でもみなさまの助けを借りて、全てが段々と上手くいくものと願っています。どうか神様のご加護により、みなさまが健康と長寿に恵まれ、神様の祝福がありますように！ コンディノバイロ家より（ベラルーシ ナロブリヤ市）

✉ 息子ルスランへのご支援に深くお礼を申し上げます。あたたかいお心、お気遣いに心から感謝しています。それは私たちにとってとても大きな支えです。あなたと周りのみなさまのご健康、ご健勝を心よりお祈りします。息子はよく風邪をひくなど体が弱いですが、幸いなことに病気は小康様態を保っています。彼は前向きで、将来はよくなると信じています。息子はもう11歳になります。5年生も無事に終えました。音楽学校でピアノも習っています。息子は音楽が大好きなのです。もう一度お礼を申し上げます。ご支援をありがとうございます。母ディアーナより（ベラルーシ ゴメリ市）



## 宮西いづみさんを偲んで

### 行動の人、宮西さん

今年3月に東井怜さん、8月に宮西いづみさんと相次いで私たちは大切な人を失った。奇しくも広河隆一写真展事務局の埼玉と三重の責任者だった。

宮西さんが埼玉から写真展事務局を引き受けたのは2001年だが、それ以前にチェルノブイリ子ども基金には、支援者として理事として関わっていた。チェルノブイリ子ども基金（旧名称：チェルノブイリ基金事務局）が発足したころ、すでに三重・チェルノブイリ被曝児童救援募金（旧名称：三重・白ロシア被曝児童救援募金）は活動を開始していた。ベラルーシの教会が世界にチェルノブイリの救援を呼び掛けたとき、まず、手を挙げたのが教会関係者だった。三重では三好鐵雄代表のもと活動していたが、チェルノブイリ子ども基金が設立されると、フォトジャーナリストの広河隆一代表を通して、確実に救援金や品物が、直接被害者の手元に渡るとわかり、あいつ、岩手、小田原などの団体と共に支部となった。

1994年の5月、チェルノブイリ子ども基金が避難民健康調査を現地で実施するため、ウクライナ、ベラルーシを訪問した。全国から集めた「折りコウノトリ」\*とアンケートを持って直接人々の思いを聞こうという試みだった。参加した宮西さんの感想が子ども基金ニュース

(No.14/1994年6月)に掲載されている。以下、一部を紹介したい。

“心に感じたこと～思いつくままに”から抜粋  
「雄大な自然の美しさ、深さ。とりわけ草原と樹々のみどり、色とりどりの花、透明な高い空。そこで放射能検知器の針があっけなく振り切れてしまったこと。色も音もおいもない不気味な悪魔の手にふれた実感。膨大な数の子どもの死に直面しながら医療体制の無きにひとしい現実に、心底怒っている医師には会ったけれど、被災者たちには、この現実（被曝による生活破壊、生命の危機）に対するうらみがましさとでも言えるような暗さ、ぐちゃぽさが感じら

れなかったこと。子どもの生命を救いたい、という切なる願いに全ての感情が集中しているという印象を受けた。広河隆一主宰「チェルノブイリ子ども基金」の救援活動のあり方に対する信頼の確認。全品全て贈る側と受け取る側の間に事務的に徹底したきびしさがある。また、保養来日、里親、学校サナトリウム入所などの子どもの選択に権力の介入を許さない子どもの側にたったきびしい条件が課されていたことなど……」

宮西さんはその後、三重の仲間を連れて、また2004年には子ども基金の2人の理事と共にチェルノブイリを訪問している。そしてチェルノブイリ事故20年の国際シンポジウム会場で、広河さんの写真展を開催しようと私たちは大きな写真を持参する役目を担ってベラルーシを訪問。宮西さんも一緒に、里子と対面した。常にチェルノブイリに心を寄せていた。そして、2011年の3.11以後は、福島の子どもの心にも心を寄せ続けた。福島に出かけ、沖縄の「球美（くみ）の里」（保養施設）にも出かけた。2016年は、チェルノブイリ事故30年、福島事故5年の節目の年、写真展開催のための費用を格安にするのでぜひ開いて、と訴えた。条件は一つ、会場でチェルノブイリと福島の子どものためだけにカンパを呼び掛けて、ということだった。常に前向きに考え、訴え、行動し続けた宮西さん。どうぞ、私たちの行動もしっかり見守ってください。

チェルノブイリ子ども基金  
共同代表 向井 雪子

\*折り紙の羽根の一部に黒、嘴を赤く塗って折ったコウノトリ。幸せを運ぶコウノトリとビタミン剤をセットにして抵抗力の落ちたチェルノブイリ被害者に配ろうと「折りコウノトリキャンペーン」を企画。全国紙もとりあげ、学校が中心になって集めてくれたところもあった。10万羽以上が集まり現地に贈った。

（※宮西さんを偲ぶ会が11/18三重県津市で開催されます。詳細は最終頁をご覧ください。）

## 黒部ドクターのお話し

私がいま心配していること。それは、ヒトゲノムに対する放射能の影響、なぜ発がんするか、です。

ヒトの体は約 50 (50~70) 兆個の細胞をもっています。1 個の精子と 1 個の卵子が結合して 1 個の細胞を作り、それが倍々と分裂して増えて 50 兆の細胞になってヒトとなります。それぞれの細胞が同じ DNA をもちます。生殖細胞 (精子と卵子) の DNA は遺伝し、突然変異も遺伝しますが、体細胞は分裂を繰り返すうちに変異した細胞ができることから突然変異は起こしません。

ヒトの卵母細胞は出生時 200 万、45 歳では 3 万 4000 個で、毎月成熟して卵子となり排卵します。出生時から備わっているこれらは放射線の被害を受けやすく、卵子には監視機構が働いているので、異常を持った卵子は成熟しません。成熟して排卵されたとしてもその卵子は受精しにくく、仮に受精しても流産・死産となり、生まれても乳児期に死亡します。だから、原爆実験や原発事故で被害を受けた地域の流産・死産率や出生率が変化するのです。

精子は 1 回で 5 億個射精され、その約半数は欠陥をもっていますが、競争で勝った 1 個の正常な精子が受精します。欠陥のある精子が受精すると、その多くは流死産します。イギリスのセラフィールド原発に働く労働者の子どもの中には有意に白血病の発生率が高いというデータが出されています。しかし放射線を浴びても (外部被曝)、6 か月の間をあければ精子への影響はないとも言います。

子どもは新陳代謝で細胞分裂を繰り返して、その数を増やしながらか成長していきますから、成長が活発な時期、つまり年齢が低い時ほど放射能の影響を受けやすくなります。20~25 歳で成長が止まると受ける放射能の影響は少なくなり、生殖年齢 (40 歳) を過ぎるとさらに低下し、55 歳頃から自然発生のがんと放射能由来のがんの差は無くなります (但し低線量の場合だけ)。

以上のような理由から子どもと生殖可能な女性が放射能の被害を受けやすいのですが、高線量の被

曝では高齢者でも早期に発がんがあり、低線量の被曝でも白血病は年齢に関係なく 3 年後から増え始めます。

DNA は体細胞で 60 億塩基対、生殖細胞で 30 億塩基対 (A と T、G と C が対)。細胞分裂のたびに 10 億塩基対に 1 回位の間違い、つまり体細胞では 6 か所程の突然変異が生じます。紫外線、放射線、化学物質などの影響を受けて突然変異が生じ、それが蓄積されていきます。しかし体細胞に対しても監視機構は働いており、その欠陥細胞は破壊されます。このようなシステムが免疫系で、それが働かない、あるいは突破された時に病気となる。つまり病気の原因には放射能も含め環境因子が働いているということです。

放射能による健康被害は体のすべての細胞や働きに及びます。福島で目に見える異常としては、白血病、悪性リンパ腫、がんの増加が、すでに始まっています。これから子どもだけでなく、大人の甲状腺を始めとするがん、それも日本人に多いがんが増えていきます。子どもたちだけでなく、高齢者もがんやこころの病気が心配です。

私が心配しているのは、福島や汚染地に住んでいる母親が子どもを心配して困り込み、子どもはそれぞれ違う性格を持っているのに、その子にあった育て方をしないために、アレルギーや発達障害を引き起こすことです。渡辺久子医師の言葉を借りれば、たんぽぽはどんなにしてもたくましく花を咲かせるが、洋蘭は上手に育てないと花を咲かせない、のと同じです。

お母さんたちに「心配しなくていいよ」と伝えたいと思います。子どものアレルギーは私が治します。発達障害は 2 歳前に見つければ、私と渡辺久子医師が協力して治すか軽くすることができます。いわき市の「放射能市民測定室 たらちね」では、「ママとキッズのこころ相談室」を作り、カウンセリング、セラピー (箱庭療法など)、身体心理マッサージ、そしてお母さんと子どものこころに沿ったセラピーを始めました。

## 報 告 会

### 「2018年夏 子どもたちの保養・チェルノブイリと福島」 12/1 (土) 14:00~16:00 (開場 13:30)

今年の夏に行われた保養の様子を報告します。みなさまぜひ足をお運びください。

- チェルノブイリの子どもの保養 佐々木真理（「チェルノブイリ子ども基金」事務局長）
- 福島の子どもの保養 麻生治成（「沖縄・球美の里」ボランティア）
- 講演「放射線と健康」 黒部信一（小児科医、「未来の福島こども基金」代表、「チェルノブイリ子ども基金」顧問）

会場：パルシステム東京 新宿本部 7F 会議室（新宿区大久保2-2-6 ラクアス東新宿）  
（最寄駅）都営大江戸線・東京メトロ副都心線 「東新宿駅」B2出口から徒歩5分  
定員 70名 お申込・お問い合わせ先：チェルノブイリ子ども基金

共催：チェルノブイリ子ども基金 未来の福島こども基金

後援：生活協同組合パルシステム東京

\*\*\*\*\*



### 2019年チェルノブイリ33周年救援カレンダー ～チェルノブイリと福島の子どもの救援にご協力ください～

毎年ご好評いただいているチェルノブイリ救援カレンダー、2019年版が完成しました。2019年カレンダーは、ベラルーシの保養施設「希望」で保養をする子どもや親子たちの写真で構成されています。

サイズは従来の半分の大きさです。場所をとらないため使いやすくなりました。ご自身で、職場で、またご友人などへのプレゼントにもぜひご活用ください。ご注文をお待ちしています。

- 定価 700円 送料別（6部まで200円）（10部以上：1部600円／送料無料）
- お申し込み方法：E-mail、Faxまたは郵送でお申し込みください。
- お支払方法：お届けするカレンダーに同封の郵便振替用紙でお振り込みください。
- カラー、サイズ：縦30cm×21cm（見開きA4サイズ）※従来の1/2のサイズです。
- 撮影：チェルノブイリ子ども基金 佐々木真理
- デザイン：川島進デザイン室
- 発行・制作：チェルノブイリ子ども基金

★カレンダーの収益は、チェルノブイリと福島の原発事故により被災した子どもたちの救援金にあてられます。2018年版の収益は112万円でした。

# 民 芸 品 と 書 籍 の ご 案 内

子ども基金では救援カレンダーの他、以下の救援グッズや書籍を販売しています。収益はチェルノブイリの子どものための薬代や保養費用として活用されます。カレンダー同様、プレゼントにも最適です。

## ①「リネンクロス」ベラルーシ製



1枚 800円 サイズ：45～50cm×70cm  
色・柄はお任せください。

## ②「マトリョーシカのマグネット」③「マトリョーシカのキーホルダー」ベラルーシ製



各1個 500円  
サイズ（およそ）②縦6cm x 横幅4cm  
③縦4cm x 横幅2.5cm  
色・柄はお任せください。

## ④メッセージカード（ハンドメイド）ベラルーシ製

1枚 300円 サイズ：10cm×15cm（模様部分は布）  
柄はお任せください。



## ⑤ 書籍『医師が診た核の傷 一現場から告発する原爆と原発』広岩近広著（藤原書店）2,200円

～23人の医師が実名で渾身の告発！絶対に“核と人類は共存できない”～

血液や甲状腺の専門医をはじめ臨床経験の豊富な内科医や精神科医らが、原爆と原発の核被害者の「核の傷」について報告した貴重な記録。『毎日新聞』連載をもとに改稿・加筆。

【目次】隠された惨劇／原爆編（息をのんだ人間の末期―外傷がないのに吐血、脱毛、そして悶死／染色体異常が生む多重がん―すべての臓器に起こるがん／不安に苛まれ続ける生涯―被爆者への無理解・誤解・差別）／原発編（多発する子どもたちの甲状腺がん―チェルノブイリからフクシマへ／福島が学ぶチェルノブイリ―子どもたちを守るために／老朽原発が生み出す労働者被曝）

“黒部ドクターのお話し”（本号13頁）でおなじみの黒部信一さん（小児科医、「未来の福島子ども基金」代表）のインタビューが掲載されています。

●ご注文方法：住所・電話番号・氏名・希望品名と数量を明記の上、

FAX・郵送・Eメールのいずれかの方法でお申し込みください。

●送料別（実費）

●お支払い方法：振込用紙を同封しますので、品物が届きましたらお振込みください。



# 募金・救援状況



## ●募金状況

2018年6月～9月

(単位:円)

|         | 6月      | 7月        | 8月      | 9月        |
|---------|---------|-----------|---------|-----------|
| 募金件数    | 104     | 175       | 62      | 33        |
| 救援寄付金   | 416,200 | 653,210   | 270,220 | 140,747   |
| 保養費     | 107,500 | 117,000   | 117,500 | 962,064   |
| 里子支援    | 19,060  | 1,934,070 | 311,860 | 12,540    |
| ニュース購読費 | 24,000  | 54,000    | 20,000  | 14,000    |
| 合計      | 566,760 | 2,758,280 | 719,580 | 1,129,351 |

\*9月保養費には『パルシステム東京』様からの平和カンパ955,064円を含みます。

\*その他、切手、ハガキなどのご寄付をいただきました。

## ♡ 団体名一覧 ♡

(順不同・敬称略)

紙面の都合上、個人名は省略させていただきます。ご寄付をいただいたみなさまに心よりお礼を申し上げます。

【6月】東京一般労組東京音大分会／アトリエろれっと子供絵画造形教室

【7月】カトリック東京大司教区徳田教会／イエス・キリスト教会祈りの家／チェルノブイリ子ども基金奥羽／三重チェルノブイリ被曝児童救援募金

【8月】広河隆一写真展事務局／東井怜さんを偲ぶ会

【9月】自治労日野市職員組合／NNJ(旧放射能倶楽部)／ストッププルトニウム神奈川連絡会／音楽センター

## ●救援状況

2018年6月～9月

(単位:円)

|                          |           |
|--------------------------|-----------|
| <ウクライナ>                  |           |
| 現地救援団体「チェルノブイリの子どもたちの生存」 |           |
| 里子支援(半年分×8人、1年分×1人)      | 367,917   |
| 病気の子どもの医薬品代(半年分×1人)      | 33,447    |
| 現地銀行手数料                  | 3,344     |
| <ベラルーシ>                  |           |
| 現地救援団体「困難の中の子どもたちへ希望を」   |           |
| 里子支援(半年分×50人)            | 1,705,725 |
| 病気の子どもの医薬品代(半年分×2人)      | 68,256    |
| 子どもの保養保険代                | 4,859     |
| 障害のある子どもの紙おむつ代           | 22,602    |
| 子どもリハビリ・健康回復センター「希望」     |           |
| 子どもの保養費                  | 1,071,448 |



ベラルーシ「希望」の保養参加者たち。募金者の方々からのプレゼント(文具、ミニ巾着袋、折り紙、本)を手に。

## ★募金振込口座のご案内★

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。同封の振込用紙によるお振込のほか、以下の口座へ直接お振り込みいただけますので、ご都合のよい方法をご利用ください。※振込用紙以外でお振込の場合は、お名前、金額、ご寄付の内容のご連絡をお願いいたします。

(1)郵便振替口座 00160-4-98316 口座名 チェルノブイリ子ども基金

(2)ゆうちょ銀行口座 店番 019 店名 ○一九店(ゼロイチキュー店)

預金種目 当座0098316 受取人名 チェルノブイリゴモキキン

(3)三菱東京UFJ銀行 支店名(番号):新宿中央支店(469)

口座番号:普通 1688367 口座名:チェルノブイリ子ども基金



# 事務局から

## ■「宮西いづみさんを偲ぶ会」のご案内

「広河隆一写真展事務局」の宮西いづみさんが、2018年8月10日に78年の生涯を終えられました。多くの市民運動にご活躍されました宮西いづみさんと生前に親交のあった方々が集い、彼女を偲び、思い出を語り合う会を下記のとおり開催いたします。ぜひご参加ください。

・日時:2018年11月18日(日)13:30~16:00  
(申込締切 10月26日)

・場所:三重県・津リージョンプラザ3階展示室

・参加費:1,000円

\* 平服でご参加ください。思い出の写真やお品をご持参ください。

・参加申込:Eメールまたは電話にてお願いします。

・E-mail: ikkoito4621@m6.cty-net.ne.jp (伊藤)

・Tel: 080-5100-5448(眞弓)

【主催「宮西いづみさんを偲ぶ会」実行委員会】

## ■「基金ニュースター」について

募金をくださった方には、使途の報告としてニュースターをお送りしています。またニュース購読費(2,000円/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。(※ニュースターは子ども基金のHPでもご覧いただけます。今後、郵送がご不要の方は、お手数ですが事務局までご連絡をお願いいたします。)



## ■ボランティア募集

ニュース発送作業(年3回:2・6・10月):お手伝いいただける方を募集します。どなたでもお気軽にご参加ください。次回予定 2019年2月16日(土)午前11時~午後4時頃まで。ご都合のよい時間帯だけでも大歓迎です。  
場所:東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋駅ビル セントラルプラザ10階) ※日程が変更になる場合もありますので、ボランティア参加希望の方は、前日までにメールかお電話でご連絡ください。電話は平日午前10時~午後5時。留守の場合は伝言をお願いします。

## ■里親募集

本号10頁に紹介している里親支援について、ご関心のある方は事務局までお問い合わせください。詳しい資料をお送ります。

### \*\*\*ご協力いただいているみなさまへ\*\*\*

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

### すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

### 払込取扱票のお名前・ご住所は楷書で ご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

### 「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で、受領確認の連絡をご希望の方には、葉書(金額は記載せず)をお送ります。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

### 「領収証」をご希望の方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収書が入用の際は振込用紙の該当欄に印をつけてください。

★編集後記★ 8月末のベラルーではジャガイモの収穫の話をあちこちで耳にしました。冬の保存食として畑で採れた夏野菜を瓶詰にする時期でもありました。ゴメリ市のある家庭では、トマト、きゅうり、キャベツ、ピーマンなど色とりどりの野菜が瓶詰にされ棚に並べられていました。今年もみなさまのおかげで救援活動を続けることができました。ほんとうにありがとうございました。来年もどうぞよろしくお願いたします。

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年3回(2・6・10月)発行●  
※新住所 〒177-0041 東京都練馬区石神井町 3-16-15-408  
Tel/Fax 03-6767-8808  
E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp  
◇ウェブサイト <http://ccfj.la.coocan.jp/>  
◇事務局ブログ <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>